

特集

地域に生業をつくる

特集 2

岐阜県

# 小さく商いをはじめること、その可能性とこれから



庭文庫 百瀬 実希

岐阜県恵那市という人口5万人の街で古本屋をはじめてから約2年が経つ。人口の多い駅前ではなく、JR恵那駅から車で約15分、美しい木曾川と山々に囲まれた築100

年以上の古民家で古本屋「庭文庫」をはじめると話したときは、多くの人から「そんなところに人なんて来ないだろう」と言われたが、それでも古本屋「庭文庫」は今日も開店している。

## 移住したときのこと

夫の実家である恵那市に越して来たのは、約4年前。沖縄で育ち、大阪へ進出し、東京で働いていたわたしにとって、「日本の田舎」というのは、あまりに異世界であった。山が近く、美しい田畑が残り、夜は蛙が鳴きまくる、そんな恵那がすぐに好きになった。けれど、古本を扱うお店がほとんどないこと、同年代と同じように本が好きな友達ができないことがとても寂しかった。いつか、夫とふたりでお店をして、子供を育てながら、働ける環境をつ



目の前の木曾川



お掃除会の様子

くりたい、とも思った。そんなこんなで、わたしたちは古本屋さんを志すことになった。  
古本屋を行うための人脈をつくり、物件を探すために、まずは恵那市の地域おこし協力隊の仕事をするに決めた。地域おこし協力隊として、空き家バンクの運営をしながら、同時に出張古本屋をはじめ、少しずつ協力してくれる方が増えていった。協力隊として働いて2年、美しい古民家を借りられることとなった。

## 古本屋「庭文庫」を不完全でもスタートさせた理由



店舗外観

正直に言うと、当時のわたしたちにはそれほど大きな貯金はなかった。だから、店舗をはじめるときも、できるだけ、ほんとうにできるだけお金をかけないようにはじめることをこころがけた。本当にありがたいことに、友人たちや地元のみなさんから「こんなものもあるぞ」と古いタンスや机、雑貨、本を贈っていただき、庭文庫の開店にかかった資金は約20万円でお店をスタートさせた。

お店をオープンさせてから、本当に多くの方が訪れてくれた。幸いなことに恵那市は名古屋から車で約1時間の立地であるから、名古屋からのお客さんも多い。新聞や雑誌、テレビにとりあげていただいたおかげで東京や関西など遠くのお客さんの中にも何度も足を運んでくださる方も出て来た。

ただ本屋というのは資金繰りが厳しい。もともと、対面の古本屋だけで生計を立てていくのは、かなり無理があることは開店当時からわかっていった。そのため、わたしたちは最初から「泊まれる古本屋」としての開業を目指していた。それまで、半分



店内の様子

は広報活動のため、半分は資金づくりのために古本屋「庭文庫」を行おうと考えていた。

大家さんの許可も出たことと、資金のあてもついていたので、次の春〜夏くらいの間「泊まれる古本屋」としての開店を目指し今、準備をしている。「泊まれる古本屋」となつてようやく、事業計画のスタート地点に立つことになる。

では、最初から、「泊まれる古本屋」としてスタートさせればよかったのではないかと？古本屋のみの機能しかないので2年もやる必要はなかったのではないかと？と言われる方もいらつしやるかもしれないけれど、おそらくその答えは「NO」だ。

この2年間で古本屋「庭文庫」が得たものは、普通に宣伝しては伝わらないであろう、この場所の魅力（たとえば古民家の佇まいであるとか、恵那の自然の美しさや、田舎に本屋があることの価値）を感じてくれる方たちとたくさん出会うことができたことだ。そうして、きつとそういう方々が「泊まれる古本屋」になったときには、うちに泊まってくれる、そう判断することができた。わたしたちは今、この形でスタートできた。



庭文庫に来てくれる同年代の常連さん

### 小さくはじめることの可能性

小さく何かをはじめること、社会に大きなインパクトを残すことは難しいかもしれない。何千万、何億とかけた施設と比較して、当然ながらわたしたちのお店の持つ力は小さい。しかしこの2年間で庭文庫をきっかけに2組が移住し、「恵那」という地名すら知らなかった方がお店を訪れ、本屋を求めた同じ地域の同世代が集まれる場所となった。小さくとも、少しだけ、何かを動かすことはできるのではないかと、いう手応えを得ている。

もしも、これが都市部のお店であれば、こんな形で続けることはできない。まず、家賃が高い。固定費がものすごく高い。でも、地方という場所だからこそ、こんな形ではじめ、そして続けることができた。思いつきのようなそんなスタートから、綱渡りではあったけれど、どうにかこうにか、ご飯を食べられるようになった。

すべてが完璧でなかったとしても、はじめることができる。それが、地方の持つ魅力のひとつであるし、きつと愛媛にもそんな風な場所や事業をスタートさせている方もいるのだと思う。住んでいる人が楽しいと思つているところにしか、人は増えない。いろんな考え方、趣味嗜好がある中で、小さく何かをはじめることのできる地方、その余白のある地域こそが、実は日本に残る理想郷なのではないか、なんてことを最近よく考えている。